

戦国時代の四大文豪（其一）：論説

著者	兒島，献吉郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 0 3
ページ	1 - 7
発行年	1903-12-25
その他の言語のタイトル	戦国時代の四大文豪（其一）：論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/5640

龍南會雜誌第百參號

論 說

戰國時代の四大文豪 其二

教授 兒島 獻吉 郎

一、寧ろ鶏口と爲るも牛後と爲る勿れ

周の威烈王以後、秦の祖龍の六國を併吞するに至る迄の歲月、二百餘年間を稱して戰國時代と曰ふ。此の時に當りて周は天子の名あるも己に統一の實なく、三綱淪み、九法敷れ、人情翻覆雲と爲り雨と爲りて禮義辭讓忠信の何たるを知らず。その期する所は富貴榮華、その務むる所は權謀術數、日に搏撃の道を講し、互に吞噬の慾を逞うし、遂に七雄の對峙と爲りて秦楚齊燕韓魏趙、兵馬の間に相頤頤し、世は果敢なくも硝煙砲火の舞臺と化して、弱肉強食の活劇を演し。合縱と爲り、連衡と變し、積屍山を爲し流血池を爲すの慘狀、到る所に目撃せられざるは無かりき。

郁々乎として文なるかなど、尼山の叟の歎美せられし周の典禮衰へ、制度壞れしは惜むに餘りありと雖も、外面より察すれば周室の綱紀弛みたればこそ、列國の形勢一變して言論界に自由を與へ、

學術界に刺激を加へたるなれ。故に當時の思想界が些少の束縛を受くることなくして、大に開放し大に發展したる所以は一に競争の結果に非ざるはなし。

競争に個人的智識の競争と、黨派的學術の競争とありて、互に顔顔し盛に軋轢せしは、これ此時代の特色にして支那四千年の歴史史上最も活氣ある所以なり。蓋し一方に於て名將勇士が矢石の間に勝敗を決すると同時に、一方に於て文人學者は口舌の間に優劣を争ひ、文筆の上に雌雄を定めんとするの風ありき。故に人後に立たんことを恐れて放言高論、一機軸を出たし一旗幟を樹て、以て天下の耳目を聳動せんとするは當時學者の常態なりき。乃ち蘇秦の所謂寧ろ鶏口と爲るも牛後と爲る勿れの一語は、雷に六國の王の意嚮に的中したるのみならずして、亦能く當時の人情を穿ち學者の心腸を看破せるものなるを知るべし。乃ち又弱肉強食の風唯に兵馬の間に行はれしのみならずして、學術界にも弱肉強食の状態ありしを知るべし。乃ち亦戰國時代の稱呼は雷に兵力上に於ける戰國たるを意味するのみに非ずして。學問上に於ける戰國たるを意味するものと謂ふも過言に非ざるを知るべし。

二、具に予を聖と曰ふ誰か鳥の雌雄を知らん

之を盛觀と言はんか、處士横議の流弊は邪說姦言、天下を擾亂し愚衆を欺惑せり、之を亂脉と言はんか、諸子蔚然並び起りて智辯を闘はし文辭を弄するは、春花秋芳一時に咲きて紅紫一簇蜂飛び蝶舞ふの觀あり、是れぞ戰國時代に於ける學界の狀況なれ。顧ふに春秋以來進歩の氣運に向ひつゝありし學界は、戰國時代に至りて忽ち萬丈の氣焰を放ち空前絶後の光彩を發したりき。孟軻か仁義を鼓吹して楊墨を距きたるが如き、莊周か無差別を主張して孔孟を誹謗したるか如き、荀卿か性惡を唱へ

て子思孟軻を非毀したるか如き、韓非か形名を説きて仁義惠愛の用ふるに足らざるを罵れるか如き、皆隱然一敵國を爲せり。其他中不害の術に於ける、公孫鞅の法に於ける、慎到の勢に於ける、亦能く一主義を標榜したる者なり。談天の趨衍、彫龍の趨爽、炙轂過の淳于髡、亦能く一旗幟を樹てるもの。惠施、鄧析、公孫龍、田駢、彭蒙、陳仲、史鱣、宋鈳、環淵、屈原、宋玉の徒は各其の所長を以て鳴るものにして、亦能く嶄然一頭地を出たせる者と謂ふべきなり。凡そ是等の學者は皆人の下風に立つて屑とせざる者にして具に予を聖と曰ふ者なり。已を是とし人を非として鳥の雌雄を知らざるものなり。就中孟軻、莊周、荀卿、韓非を以て當代の四大文豪と爲す。孟軻の文は長江の如く、莊周の文は大海の如く、荀卿の文は湖水の如く、韓非の文は溪流の如し。孟子の文は理を以て主と爲し、氣を以て之を遣り、才を以て之を扶くるものなり。莊子の文は才を以て主と爲し、氣を以て之を行り、理を假りて之を文るものなり。荀子は理を以て主と爲し、辭を以て之を文り、而して氣足らざるものなり。韓子は氣を以て主と爲し、才を以て之を助け、而して情足らざるものなり。孟子は規模の精正を以て優り、莊子は局面の闊大を以て勝り、荀子は文辭の豊富を以て推され、韓子は氣力の勁健を以て稱せらる。是れ四大文豪の得色なり。若し夫れ他の諸子百家の如きは日月に對する燭火の光の如きのみ、江河に對する涓滴の水の如きのみ。固より同日の談に非ず。請ふ予をして莊周に就て論せしめよ。

三、莊周の性格と學説

以謬悠之說荒唐之言無端崖之辭、時恣縱而不黨、不以奇見之也、以天下爲沈濁不可與莊語、以厄

言爲曼衍、以重言爲眞、以寓言爲廣、獨與天地精神往來、不敖倪於萬物、不詭貴非、以與世俗處、其書雖瓌璋、而連卡無傷也、其辭雖參差、而諷詭可觀。

是れ莊子の末篇、即ち天下篇中に莊周を評せし所の一節なり。然れども天下篇は蘇軾王安石等の認定せるか如くに莊周の自作なるか、將た朱熹が主張せるか如くに莊子を學ぶものゝ手に成りしか、這問題解決せられざる以上は這一節の文字の價值如何も亦容易に決定すべからず。予は天下篇を以て莊周の自筆なりと信する能はず。然れども亦決して漢以後の學者の手に成れりと信するものに非ず。假令莊周の自筆に非ずとするも亦必ず先秦の學者にして善く莊周を知れるものに非されは決して斯評論を下すこと能はざるへし。何となれば這一節の字々句々、眞に能く莊周の觀念及び彼の言語文章學問を評し盡くして餘蘊なければなり。

彼が少時より修養し來れる學問は必しも謬悠の説、荒唐の言、無端崖の辭に非ざるへしと雖も、濁世の潮流は竟に彼をし極端なる理想海に沈淪せしめたりき。蓋し彼は天下を以て沈濁にして與に莊語すへからすと爲し、世俗を以て輕佻にして俱に高論すへからとす爲し、是非の到底決すへからざるを知り、辯論の結局無益なるを悟り、遂に瓌璋の辭を擒へ、洗泮の言を作し、恢詭譎怪の辯論を弄ふに至りぬ。

然れども彼は元來世を遺るゝものに非ず、世を厭ふものに非ず、世を憤るものに非ず、又世を拯はんとするものにも非ず。彼はたゞ放言を以て一世を愚弄し滑稽を以て天下を馬鹿にするものなり。然るに世人往々其辭に眩惑して、其意を存する所を釋ぬる能はず、遂に彼を評して老氏を仰宗すと謂

ふものあり。又陰に孔子に賛同すと謂ふものあり。是等は皆自己の見地に膠着して漫に莊周を批評するものにして、莊周の位地に立ちて莊周の眞相を發揮するものに非ざるなり。彼の口は已に無差別を唱へり。彼の眼には固より古人なきなり、いかでか孔と老とを差別して是非を其間に挟むへけや。故に彼の主義よりして推測するときは彼れ孔子の徒に非ざるが如く、亦老氏の徒に非ざるべし。即ち彼は無差別主義を絶叫して一世を玩弄せんとするのみ。

彼の資性を察するに彼は瑰詭機變の才智ありき。彼は犀利當るべからざるの氣鋭ありき。彼は議論風發の辯舌と氤氲湧くか如きの文藻とを兼備したりき。想ふに彼は大有爲の材幹を具したるものにして。決して無意無心の仙的性格を備ふるものに非ざるなり。又決して血なく涙なき泥塑的人物に非ざるなり。然れども彼は世の濁流に激して故意に波を中流に揚げんと欲し。遂に天地一指万物一馬の説を立て、世人をして彼我の分を撤去し是非の境を混同せしめんと試みたりき。しかも這主張は結局自家撞着に歸し了りぬ。何となれば已れの無差別的意見を標榜せんが爲めに他の差別的主義を非難するは是れ既に自他の區別、是非の觀念あるものに非すや。且彼の言行を察するに何ぞ不自然の多きや。何ぞ情を矯むるの甚しきや。

無差別主義を實行せんと欲せば世を遯れて風塵の外に起脱し身は槁木、心は死灰と爲るに非ざれば到底能はざるなり。若し其眼中に國家あり人民あり之を云々せんと欲して口を開けば已に撞着なり。書を著はすも亦撞着なり故に彼が無差別主義を主張しながら却つて自己の主張に矛盾して一個の主義定見を發表し世の瞶々者流をして其後に瞠若たらしめんとするは即ち是れ彼の野心なり。彼の狂

言なり。王安石の言へる如く彼が太廟の犧牛を引きて楚の招聘を辭せしも、畢竟危言を以て衰世の常人を驚かさんと欲するのみ。こは彼の慣用手段なり。然らざれば死生を外にする彼にして安んぞ獨り犧牛と爲りて殺さるゝを恐るゝの理あらんや。蓋し彼は到底雲に騎り風に御して太空無始の中に逍遙する人に非ざるなり。當時彼は雄心未だ衰へず、霸氣未だ滅せず、塵垢の域を厭ひながら、しかも未だ斯世を遯るゝ能はず。自然の門を望みながら、終に造物者と與に無窮に遊ぶこと能はず。滔々たる世の濁流の中に浮沈しつゝ、物に感じ事に激して鬱勃の情、嶢嶢の氣、識らず知らず語言の外に露はれ文字の中に寓し、時に婉辯と爲り、時に雄篇と爲る。是れ皆彼の胸中に蟠れる一片の不平未だ溶解せずして、彼の心底に藏せる無限の熱血自ら湧き出てしに過ぎざるなり。宜なるかな天下篇中に彼を墨翟禽滑釐宋鉞尹文彭蒙田駢慎到關尹老聃の後に列して所謂一曲の士と見倣し遂に彼を茫乎昧乎未之盡者と論定せるや。

要するに彼の才の英を以てして、自己の主張が有情有意的人間に實行す可らざるを知らざるの理なし。況んや又無差別主義を主張することの、遂に自家撞着に歸するを知らざるの理あらんや。然るに彼が這主張を貫徹せんが爲めに口を開き書を著すは、即ち彼が一世を愚弄し天下を馬鹿にするに過ぎざるのみ。試に俚言を以て評すれば彼は文學界のいたづら者なり、思想界の惡五郎なり、若し雅言を以て評すれば彼は孔子の所謂隱居放言者に近からんか。

四、莊周の學統

無差別主義を主張する所の彼か、儒墨に對して攻撃の態度を執るとの自家撞着なるは前節已に之を

陳へぬ。然らば彼の主張よりして視れば彼の眼中に大鵬と尺鷃との差別觀を爲さざるか如く、亦孔墨と老との區別を無視せざるべからず。即ち彼は孔子を崇拜せざるが如く、亦老子をも推尊せざるべきなり。彼は墨子の徒に非ざるが如く、亦老子の徒に非ざるべきなり。

然れども彼は固より無差別主義を實行するものに非されば、儒墨と老とに對しても必ずしも平等觀を爲さずして自ら輕重を三子の間に措きしものゝ如し。即ち彼の學問上の系統は孔墨二子よりも老子に近接せるものゝ如きなり。故に司馬遷は彼を以て老子の徒と認定せり。是れよりして後人、老莊並へ稱して疑はざるに至れり。唐の陸德明、明の陸方壺王元貞の如き皆然らざるはなし。然れども彼は固より老子の餘瀝を嘗むることを屑しとせざるものにして、實に道經以外に一生面を拓きたるものなり。こは彼の性質氣鋒、人後に立つを厭ふに由りて然らざるを得ざるなり。故に天下篇中に諸子を列擧するに當り彼を關尹老聃と並稱せずして、別に一家と見倣して評論せるが如きは、眞に善く彼の眞相を知れるものならずや。

韓退之は彼の學統を原ねて子夏の餘流と爲せり。然れどもこの説は畢竟退之の臆測に過ぎずして考據あるものに非ざれば信を措くに足らざるなり。蘇東坡に至りて斷して司馬遷の説を取らず、反て彼を以て孔子を助くるものと爲せり。明の焦竑は東坡の説に賛して子瞻の論能く其髓を得たりと言へり。清の林西仲も亦彼を以て孔子派に屬するものとせり。要するに儒者往々儒眼を以て彼を視、儒言を以て彼の言を解し、遂に無理にも彼を孔子の流を酌むものと爲さんとす。皆我田に水を引く類のみ。晁公武が東坡の説に反して陰に孔子を助くるの理なしと曰ひしは其言妥當なり。(未完)